◆人生詩集（五）◆

多谷昇太

「魂の故郷」

灼熱のインド、三等列車の長き旅。
クーラーもなく、網棚まで人が占拠する混
雑に耐えかねて、デリー手前、
小さき駅に途中下車しぬ。
その晩その町宿に泊まりぬ。

明けて翌朝再び駅に向かわんと、
朝霞たなびく村を行けば、
何とはなし、胸に迫り来るものあり、
こは何ぞ？

わが故郷、わが家に帰り来たるような、
不思議の思いす。
否定すべくもなき、げに切なる郷愁なれば、
わが胸の内おだやかならず。
のぼる朝餉の煙の、腰布巻きたる女の、
繁る菩提樹、遊ぶ子供らの、
村の情景これすべて懐かし！
ああ、はるかなる昔、
われは此処に生を送らざりしや！？
あわれ、此処ぞ我過去世の地、故郷なりき！

長き流浪の旅の途次、
転生の果てに、わが魂の故郷とて、
足を止めさせしものをや…

〔※一九七五年五月、インド・アサンソールにて〕

「ゆっくりの世界」

私の歩みは遅い。
一歩、また一歩、やっとの思いで足を進める。まだ三十八でしかなのに、私の歩みはまるで老人のようだ。
一歩歩くたびに激痛が腰に走る。
痛さのあまり脂汗が顔に浮かぶ。
ため息をついてビルの壁に手を置き、しばらく立ち止まらざるを得ない。

通りでは誰もが皆急がしそうに歩いて行く。
さっき一人の男が舌打ちをして私を追い越して行った。女子高生の二人連れが「プータロー」と小声で云い、笑いながらすれ違って行った。

しかし考えてみれば私も、ちょっと前までは彼らと同じように歩いていたのだ。
人混みの中さっと身をかわし、人を追い越しては、まるで競争でもするかのように早く、早く、とにかく早く歩いていた。
それはたぶん、世の流れに遅れまいとして…いやむしろ、それに流されていたからだろう。みんな早ければ、気づくもんじゃないさ…。

それがいまでは嘘のよう。
小刻みに、まるでゾンビのように歩いてく。
一歩一歩がたまらない痛みだ。
「なぜこんなことに…？」と神をさえ恨みたくなる。トラックの運転手の職業病だよ

と云われればそれまでだが、納得できるものじゃないさ。「なぜ自分が？」「仕事ができないじゃないか」「（人生は）不公平だ」等々、愚痴が尽きることはない。

―この痛みはなんのための痛みなのか？

―この痛みは身ではない。心の痛みだよ。

馴染みの運河の畔へようようの思いで身を運ぶ。欄干に肘をついて眼下の川面に眺め入る。早春のさわやかな風を受けて、たろやかに水が流れて行く。

「おーい、川よ。俺はこの先いったいどうなるのかな？たしか俺は大型の免許を取って、あの資格も取って…いい仕事見っけて、金を稼ごうと…」

川の水が一瞬笑ったような気がした。さらに川面を見つめていると、いろいろな人の顔が水に浮かんでは流れて行った。自由で、とらわれのない、みんないい顔をして流れて行った。

「おい、いつまで，ねばならぬ‘人生を送っているんだ？重い荷物はみんな捨てて、流してしまえよ。その腰にかかえている、重たいやつをさ」

とそう云って、流れて行った。

―新しい世界を見よ。触れよ。

―主が重荷を担ってくださる。

家路につく私。
駅からアパートまでの距離が途方もなく長い。だけど、そのいつもの道が、今日は特別。今日は新鮮。痛みを受け入れたゆっくりの目で見ると、いままで見えなかった、いや、見なかったものが、よく見えて来る。足もとの草が、側面のブロック塀の割れ目が、その奥の庭先で植木に水をやっている老婆の姿が、見える。夕焼けの空が見える。通りの銀杏の木に手を触れ、全身大で見る。その葉っぱ一枚一枚までもが見えて来る。ああ、なんとゆっくりの世界は豊だったのだろう！あせって、生き急いで、その実私はすべてをＰＡＳＳしていた。このままもし突っ走っていたならば…？
ゆっくりの世界はこうして私を止めてくれた。しかし、はて、いつかどこかで、私は同じことに気づかなかっただろうか…？

―そう。スイスの白銀の窓辺で。

この先、もしかしてまた、私が道を外したならば、ゆっくりの世界は、また現れてくれるのだろうか？　いつでも…？

―然り。重荷となって現れよう。都度現れよう。あなたが荷を望むからだ。主が何度でも背負われたのに。主があなたに御頭を下げられて、合掌されてまで、託されたことを、あなたが忘れる度に…。

アレしなきゃ、コレしなきゃ。しかし重たいな…

〔※一九八六年頃、横浜・井土ヶ谷在住時〕

「埃の下の命」

無人の廃墟のようなアパート。
その一室に入る。夢の中でのことだ。
そこは昔の、子供の頃のぼくの住まいで、
何十年という時の埃に埋もれながらも、
心の中ではしっかりと、消えることなく、
残存してくれていたのだった。
忘れてしまっていた数々のよきものが、
思い出の品々が、埃の下から愛らしいメロディを奏ではじめる。
メランコリーの？ノスタルジアの…？
然り。否定はすまい。
ぼくはもう年老いているし…。
でもひとつだけ奇妙なのはそこが、
つまりアパートの外の世界が、
ヨーロッパだということ。
ぼくは若いころ人生をかけて渡欧し、
絵描きに、詩人になろうとした。
無謀にも人間存在の意味を、人生の意義をさぐろうとした…。
しかし夢果たせずに帰国し、
そのまま無為の人となっていたのだった。
あれから長い年月が経った。
もうすべては、
とうに終わってしまったはずなのに…？

しかし忘却の埃の下では、
命が、まだ息づいていた。
ぼくの中のよいものをしっかりと守って、

波動を送り続けてくれていたのだった。
ぼくの命は、魂は、今もヨーロッパに居て、
「なにくそ、このままでは国に帰れない。
ぼくは、必ず、ここで…」と、
気負い続けていたのだった。

わかったよ、魂よ。
君は生まれ故郷のアパートに、
ぼくの原点に、舞い戻ってくれていたんだね。ヨーロッパをともなって。

年を取ったのはぼくの身体と意識だけで、
魂が老いることは、負けて投げ出すことは決してなかった。
ぼくは、この積りに積もった埃をはらいのけて、もう一度、
そしてこんどこそいつまでも、
君とともに歩み続けることとしよう。

〔※年月定かならず。六〇前後の未だ無明の中で〕

「なにくそ、ぼくは…」無明の自分が出した想念と愚行の塵の中で、魂は…